

SPIE 2014 モントリオール報告

家 正 則

〈国立天文台〉

天体望遠鏡と観測装置に関して2年ごとに開催されている国際光工学会のシンポジウム SPIE2014 Astronomical Telescopes + Instrumentation が、2014年6月22日-27日にカナダのモントリオールの国際会議場で開催された。SPIE2014では、「宇宙望遠鏡と観測装置I」、「宇宙望遠鏡と観測装置II」、「地上望遠鏡V」、「光赤外干渉計IV」、「地上望遠鏡観測装置V」、「補償光学IV」、「観測所運用V」、「システムエンジニアリングVI」、「最新光工学技術」、「ソフトウェアIII」、「ミリ波/サブミリ波VII」、「検出器VI」の合計12のコンファレンスが並行して開催され、1733論文が発表された。全論文の共著者総数は7510名に達する。6月23日午後後半の各セッションの参加者総数（複数セッション参加者の重複カウントあり）は3,667名に達した。共著者リストで見た日本人著者総数は350名となっているが、実際の会議参加者数は120名程度であったと思われる。

今回は、全体組織委員長 Luc Simard (カナダ)、Gillian Wright (英国)、副組織委員長 Colin Cunningham (英国)、家 正則 (日本) で全体企画を行ったが、基本的に2008年のSPIE以来、そのコンファレンス構成は変わっていない。

全体企画講演としては JWST (M. Clampin), SKA (P. Diamond), GAIA (T. Prusti), ALMA (P. Cox) の四つの大型国際計画の現状のレビューに続いて、ESO VLT の次期装置 MUSE (R. Bacon), カナダの宇宙科学 (J. Hutchings), すばるの HSC (宮崎 聡), TESS (G. Ricker) の計8講演が聴衆を集めた。

長年の SPIE シンポへの貢献から、TMT の L. Stepp 氏が SPIE Fellow として顕彰された。次回の SPIE 2016 はエジンバラでの開催が決まっており、慣例で副組織委員長が組織委員長を引き継ぐ。コンファレンスチェアが集まり、今回のシンポジウムの反省点・改善案を議論し、次回以降についての意見交換を行う場では、2018年の会議を日本に招致したい旨、Cunningham 氏からのサポートもあり、家から提案した。これは、北米と欧州での交互開催のルーチンを拡げ、開催候補地としてアジアやオーストラリアも検討することを提案したものである。2008年にも家から同様に2012年のSPIEの日本招致提案を行い、歓迎の意向が表明されたものの、直後のリーマンショックのあおりを受け、実現しなかった経緯がある。11月に来日した現SPIEプレジデント Phillip Stahl 氏及び事務局と協議したところ2010年サンディエゴ以降、3回連続で米国外での開催が続き、米国内研究費の法律改正でNASAやJPLなどの国立機関からの海外研究会参加者枠が厳しく制限されるようになったこと、2018年にはJSWT打ち上げ直前となること、また米国内では大型ホテルが宿泊客などの収入を見込んで会場費を大幅ディスカウントするパッケージのオファーがある、などの事情から2018年の日本招致は難しい状況であることが判明した。国内開催実現には今一段の工夫が必要と思われるが、SPIE次期プレジデントの谷田見豊彦氏のあと押しもあり、事務局も基本方針に賛成なので、国内開催が実現した暁には、是非ご支援をお願いしたい。